

探検記のたのしさ

たとえペンギンの卵一つでも

アムンセンは成功し、スコットは失敗した。

しかし、それは探検記を持つ一面にすぎないのだろう。

二つの隊が求めたもののちがいは何か。

池内さんが探検記を読む愉しさを綴る。

人一倍の情熱と深い孤独感

幼いころ、子供向けの伝記シリーズ

で南極を知った。『南極点の発見者アムンセン』や『スコット隊の悲劇』を、目を輝かせて読みふけた。

『南極の偉人 白瀬中尉』というのもあった。白瀬^{のぶ}轟陸軍中尉を隊長とするわが国初の南極探検隊は、明治

四十五年（一九二二）一月、南緯八

〇度五分の地点に到達。そこを

「大和雪原」と名づけた。

幼い頭であれこれ南極を考えた。

地球のお尻のような一点である。地球が自転しているのであれば、そこはコマの芯のようにクルクル廻っているのではあるまいか。夏は太陽が

沈まない。どちらを向いても北というのは、いったいどういことだろ

う？

ほんの二世紀前、地球はまだ十分に広がった。あちこちに「未知の空白」があり、それが冒険家たちを引き寄せた。古典的な探検記といわれるものは、この前後にいつせいにあらわれた。

経典を求めて旅立った者もいれば、軍事的使命をおびていた者もいる。歴史に名をのこすことを願った野心

ドイツ文学者・エッセイスト

池内 紀

●いけうち・おさむ 1940年兵庫県生まれ。近著に『富の王国 ロスチャイルド』（東洋経済新報社）、『世の中にひとこと』（NTT出版）、『日本風景論』（角川選書）、『東京ひとり散歩』（中公新書）など。